

風土記の丘の花だより²⁴⁵

今、そしてこれから見られる植物(2024年7月20日)

これをご覧いただいている頃には「梅雨明けしたとみられる」の状況かもしれませんね。天気予報もアッサリと「梅雨が明けました」と言えばいいのにね。そう思いませんか？そんなことはどうでもいいとして、今回も4つの花をご紹介します。



オトギリソウです。毎度おなじみの解説になってしまいますが、鷹匠の兄弟がいて、この草から作った秘伝の薬を他言したことを巡って、兄が弟を斬り殺したという伝説から「弟切草」となづけられたとか・・・この写真は谷村家の南斜面で撮りましたが、黄色い花はよく目立つので、ほかの場所でも咲いていればすぐに気づくとおもいますよ。ところで、これを撮った場所でも、年々株数が減ってきているように感じます。どうしたわけでしょう。



小早川家の庭や万葉植物園でヒオウギの花が咲き始めました。花だけでは寂しいので、チョウが舞う写真にしてみました。これはモンキアゲハ、このあときれいなカラスアゲハが飛んで来ましたが、うまく撮れませんでした。それはさておき、万葉の頃には、この植物の黒い実を「ぬばたま」と呼び、それは黒、闇、夜、髪など、黒いものの枕詞としてよく用いられました。「居明かして 君をば待たむ ぬばたまの 吾が黒髪に 霜はふるとも」なかなか艶めかしくていいですね。万葉集にはこんな歌が多いですね。



この暑い夏に、「秋」とは名ばかりのアキノタムラソウも咲き始めました。草むらの中から長い茎を伸ばし、薄紫色の花を段々につけます。シソ科の植物で茎の断面が四角です。秋に咲くタムラソウという意味でしょうが、タムラソウをご存じ方は「どこがタムラソウに似ているというのだ！」と思われるでしょう。タムラソウは山で見かけるアザミのような花です。多紫草、屯草など、いくつかの当て字がありますが、その辺りに名前の由来のヒントがあるのでしょうか？



万葉植物園の中段、左あたりに柵で囲ってオモダカ（アギナシかも・・・のちほど調べます。）やセリが植えられている一画があります。その隅に背の高い草が花火のような花を咲かせています。花というより「穂」と言った方が似合っているかも知れませんね。それはアブラガヤというカヤツリグサ科の植物です。何の変哲も無い大型の雑草に見えるので、つい見逃してしまいますが、このあたりでは余り見かけない草ではないでしょうか？かつてどなたかがここに植えてくださったのでしょうか。ありがたいことです。 松下